慈濟ものがたり

249

慈濟基金會
2017 年 9 月

五十年

TZU CHI ● ツーチー

表見返し●

文・證厳法師/訳・黒川章子/撮影・蕭耀華

１９６７年７月「慈済月刊」創刊号の言葉

私たちの一字一行は
すべて、人を導き、
世のためになる話を語ります。

この考えに背く
無意味な行いは排除し、

「慈悲」と「済世救民」の志を
貫き通します。

目次

【社論】
清らかな泉で人心を浄化しよう　慈願／訳　4

【主題報道】
信頼を求めて創刊した「慈済月刊」
長寿雑誌「慈済月刊」を支えてきたもの　呉国禎／訳　8

【読者の声】
台湾篇　黒川章子／訳　34
海外篇　黒川章子／訳　36

【報道最前線】
出会いは一瞬の美しさ
感動はいつしか生涯の志に　閻麗妮／訳　44

平凡な人でも非凡なことを成せる　周賢農／訳　50
朝日のように鮮明な記憶　性諒／訳　59

【五十周年記念紙上写真展】
月刊撮影記者TOP50　心婺／訳　68
最も感銘を受けた環境保全老菩薩　明彤・　71

【真善美筆耕ボランティアへの敬慕】
文章の中から見つけた幸せ　葉美娥／訳　78
尖った筆をしまい、月夜のように澄んだ心で綴る　高雪白／訳　82
堅い決意は無限の力　慮撷／訳　89
悔いのない人生を筆で歩む　慈昶／訳　94

【納履足跡】
一日の計　山田智美／訳　100
慈済大事記【八月】　済運／訳　104

表紙

菩提樹の旧葉の先に新葉が伸びていくように、「慈済月刊」は五十年の間慧命を受け継いできた。今後もさらに内容を充実させ、人の善良という美を読者に伝えていきたい。（設計・黄筱哲）

【社・論】

清らかな泉で人心を浄化しよう

◎證厳法師主講　訳・慈願

「慈済」という一枚の新聞によって、慈済人文志業は幕明けした。五十年前の七月二十日に出た創刊号は、たった一枚の新聞の体裁で、募金者の名前が細かく記録されていた。こうして集められた浄財で救済活動を行っていたことに、早期の艱難辛苦を窺い知ることができる。

その後、一枚の新聞から二枚、三枚に増え、さらに月刊誌になり、慈済の歴史、真実の出来事、慈善の伝達、医療、教育や各志業など、報道内容は充実してゆき、読者層も広がっていった。

時代の変遷に伴って、慈済人文志業は白黒の平面媒体から、さらに大愛ラジオ、そして科学技術を駆使した大愛テレビも生まれ、それぞれ社会に広く清流を流して、人心浄化の速度を加速させている。

メディアはよい話を伝え、よい事を奨励するのに最良の手段である。人々によい事を知らせ、感動した人々がまた喜んでそれに応えてこそ、この世は幸せになることができる。

メディアは本来、時代の方向に民衆を導くものである。だが、今は視聴率を求めるがために焦り、負の現象や批判の声を誇大して報道しがちだ。すると、悪いことばかり毎日見聞きしている人々は、互いに不信感を抱くようになり、さらには恐怖や不安を増してしまう。「一人がついた嘘が万人に真実として伝わる」と言った人がいる。こうなると、いつしか社会は騒乱の様を来すだろう。

こうした風潮の中で、清流を伝えることは容易ではない。だが慈済のメディアは、「真実の正しい出来事を報道し、人々の心を安定させる」ことを使命としている。人々が互いに愛し助け合う美しい善のストーリーを、真実のまま正しく伝え、大衆を導く。そして社会の目となり耳となって、人々の視野を広げ、この世で起きている出来事の真実を伝えて、正しい方向を指し示すことに努めている。

慈済人文志業に携わる職員同志と世界中の筆耕ボランティアが、人々に社会の温かい面を伝えていることに感謝している。医療は生命を救うが、メディアは慧命を救う。文章や写真、映像によって人々の心を動かし、善と愛を波及させる。人々が真心で付き合い、互いに信じ愛するなら、この世は穏やかで平安になることができる。

❑静思語

【楽しく過ごそう】

人間の生老病死はごく正常なことである。これらのために煩うより、毎日を陽気に過ごそうではないか。

信頼を求めて

創刊した「慈済月刊」

◎文・慈済期刊部慈済史編撰組　写真提供・慈済花蓮本會　訳・呉国禎

一九六七年七月、「慈済」という新聞紙一枚の機関紙が創刊された。愛の心を差し出してくれた人々に、献金がどのように使われ、どのような人々を助けることができたのかを知ってもらうためであった。

證厳法師はこうおっしゃった。「皆さんから頂いたお金を、一元たりとも無駄に使わないことが『正しい道』であり、それを実行しているからこそ信用されるのです。そうすれば、多くの衆生が集まることでしょう」

慈済功徳会が創設されてから十四カ月後の一九六七年七月二十日、新聞と同じB3サイズで「慈済」が創刊された。證厳法師は、「創刊にあたって」と題して、創刊の主旨を次のように記された。

この「慈済」という出版物には、その名の通り、「慈悲の心で、救済を志とする」という思いがこめられています。それは狭義に偏らず、広義的にとらえ、ネガティブではなくポジティブに行動しようというものです。創刊の趣旨は「仏教の真髄を宣揚し、仏教に基づく生き生きとした活動を報道する」というものです。この世の善人、善事を人々に紹介し、堕落した風潮を清流に引き戻したいという思いが込められています。「仏教真髄の宣揚」と「仏教活動の報道」が慈悲の出発点であり、「済世救民」を最終の目的としています。

證厳法師は、「慈済」は紙幅は少ないけれども、非常に貴重な出版物だと次のように強調されている。

我々は一文字一行さえ無駄にはしません。無意味な話や、世の中の役に立たないことを書いたりしないということです。この趣旨と意志に反することはしません。つまり、周りに影響されて、「慈悲」や「世の救済」と無関係なことに関わることはありません。

「慈悲を念頭に、救済を信念に」との原則に沿ったこの刊行物は、白黒で印刷し、新聞紙一枚、四面立ての体裁で、隔週で発行した。創刊号の発行部数は三千部であった。

信頼を求める力の発揮

昔、台湾の寺院で法事を行う際に、信者がお米や金銭などを寄付していた。寺院は寄付の内容をリストアップして、その明細を寺院の壁に張り出す。この伝統的なやり方に従って、證厳法師は功徳会を創立してから各委員に対し、寄付されたお金を詳細に募金記録簿に記入するように命じた。そして、随時それを公開して、寄付者たちの信頼を求めたのである。

会員数が日々増加するのに従って、募金明細は一枚の紙にはおさまらなくなった。もし刊行物があれば、寄付者と寄付金の額を詳細に記載できるほか、人々にもその寄付金の使途を知らせることができる。善行したい人の善念を一層引き出すこともできるかもしれない。

ところが、一九六七年の台湾は依然として戒厳令が敷かれていた時期であった。集会や結社、言論、旅行、出版などのいずれも戒厳法によって規制されてい

慈濟

寡居貧病老婦林曾
獲慈濟會長期救助
按月付生活費並僱人照料
會員實踐佛教旨功德無量

社論
發刊獻辭

歡迎參加慈濟
功德會為會員

慈濟功德會善舉
女菜販罹患眼疾
出資送羅東就醫

基隆市百餘佛教徒
沿街托鉢募款勞軍

●1967年7月に創刊した「慈済」。すべての義援金は一銭残らず救済に使われる。人々や社会の役に立たない無意味な話を書いて誌面を無駄遣いすることはない。「慈悲」と「世の救済」を発刊の目的とするとはっきり言明した。

た。刊行物を出すことも簡単なことではなかった。当時台湾最大手紙だった「中央日報」の花蓮支局長を務めていた林志勝さんが、花蓮の新聞記者聯誼会の理事長であった。メディア業界に勤めていた慈済委員の陳貞如を通じ、林志勝さんの協力を得ることができたため、「慈済」の発行登録申請を行った。

本籍が中国山東省の林志勝さんは、爽やかなタイプの人で、顔が広い。彼は「慈済」の発行者となることを快諾してくれた。「中華日報」花蓮特派員の侯蔚萍さん、「中国時報」花蓮特派員の温煥元さんは、「慈済」の発行の申請手続きを手伝ってくれた。この三人は花蓮のメディア業界でかなりの影響力を持ち、「地方の顔役三仙人」と呼ばれていた。彼らは證厳法師の、貧しい山間部の貧困者を救済したいという精神に感動し、積極的に協力してくれたので、「慈済」の発行許可が順調に下りた。

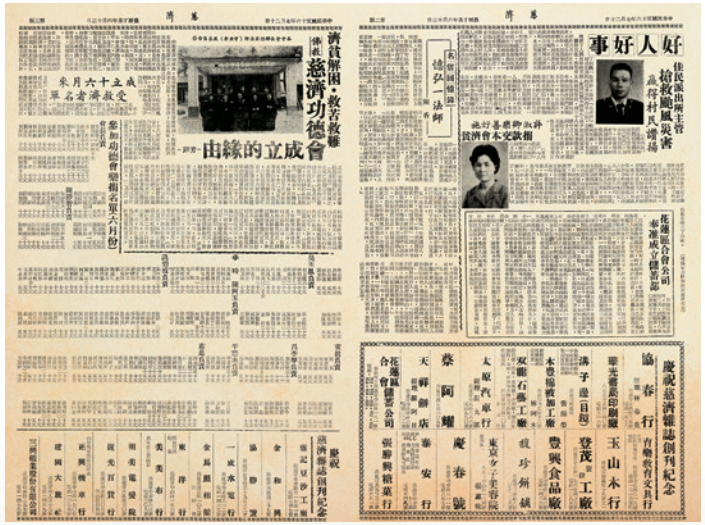
そして、陳貞如と、同じく慈済委員の呉玉鳳が、それぞれ「慈済」の社長と副社長を担い、侯蔚萍さんは編集長に、「民声日報」特派員の李業漢さんが兼任記者となる。創刊当初は毎号の紙代と印刷代に約千五百元かかり、その費用はすべて陳貞如と呉玉鳳が負担した。

誠の心を以て
正しい道を信じ実践する

創刊号の一ページ目に、仏の弟子となり、仏陀の慈悲を体験し、大士に追従するよう呼びかける次のような記事が掲載された。

仏法とは善行の力により苦しみが除かれ、楽が与えられることを宗旨とし、生死苦悩を解脱して誠を拠り所とするものです。目の前にある貧しさや病、孤独、災難などの苦しみに対し、憐憫の心を一層発

●善人や善事を報道し、人の心を善に向かわせることが、「慈済」が伝えたい理念の一つである。



揮し、救援すれば、よい方向に向かうでしょう。ましてや今は目の前の土地が汚染され、社会が混乱し、苦難が多いのですから、私たちは仏陀の弟子として仏陀の慈悲の悟を会得し、大士の行道に追従し、力を出して他人を助けてあげましょう。この理念に従って、「慈済功徳会」が立ち上げられ、会員を募集し、納められた寄付金を月ごとに詳細に記録して公開し、その浄財によって苦難の淵にある人々を助けて参りました。善行によって募った寄付金は第一信用合作社に預金し、許居士聡敏を管理者としてお願いしました。毎月二十四日は證厳法師が薬師経を読経し、厄除けや長寿などを祈願したのです。

仏陀は苦難の人を救うことを優先しなさいと語っています。善行はこの世で最高の楽であると言われます。慈済功徳会の設立によって会員が増え、浄財も集まり、さらに多くの人を救済できるようになりました。一方、善行をしたい方も日増しに増えてています。そうした人たちについて、この紙面に掲載いたします。

慈済功徳会　敬白

この文章は證厳法師が帰依した印順法師が寄せられた言葉で、困難を乗り越え、慈善活動に従事する弟子に送った励ましの言葉である。

創刊された「慈済」が担った最も重要な役目は、「信頼を得る」責任を果たすことである。だから毎号に必ず寄付者の名前と寄付金の額を一人残らず記載した。寄付金のほとんどは五元、十元などの少額であった。それにもかかわらず、證厳法師は一銭も漏らさず、はっきり記載するように求めた。「寄付者氏名不明」という記載は許さなかったという。

また、愛の心を寄せてくれた人に、寄付金の使途や、誰を救済したかを知らせるため、「援助を受けた人のリスト」を記載した。

「一銭たりとも手を抜かず、正しくあること。正しいからこそ信頼され、さらに寄付者を募ることができる」と證厳法師は強調した。一方、慈済委員は募金活動のほかに、苦難の人々に寄り添い、実際の行動によって奉仕した。「訪問や見舞いに時間をかけ、交通費も自己負担する。このように心から喜んでやることは誠である」

誠正実のほかに信が必要である。證厳法師は、「馬車に腕木が必要であるように、信は慈済と会員の間の腕木である。信があるからこそ人間の善根を啓発して功徳を養うことができる」と言われた。

誠・正・信・実という四つの文字は、

證厳法師が弟子に度々言い聞かせる教えであり、「慈済」という刊行物はその教えを広める使命を与えられたのである。

寄付金の情報公開のほかに、創刊号には功徳会が初めて長期ケアを行った林曽さんのことや、八百屋の盧丹桂さんの目の手術と治療のために、長期にわたって援助を提供することなどが記載された。

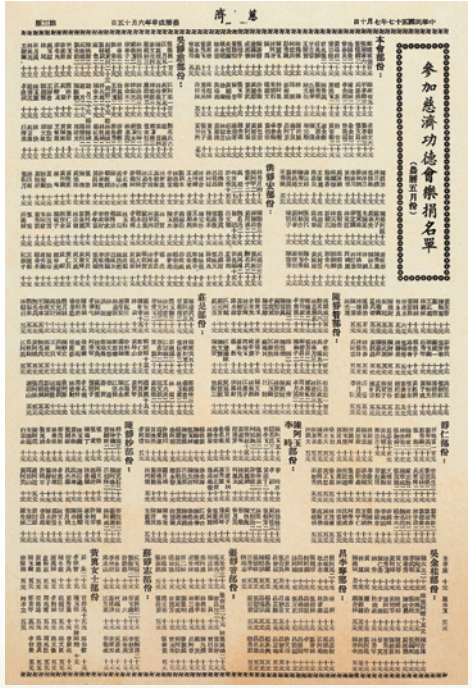
毎日の日めくりカレンダーの裏を使って證厳法師がこれらの物事を細かく記録したものが原稿である。訪問で見聞したことを詳細に記入してある。それを侯尉萍さんや陳貞如が記事に書き直し、「慈済」に掲載した。日めくりカレンダーの紙に、鉛筆や青や赤のボールペン、毛筆などで書いた文字がびっしりと重なっている。これは證厳法師が自ら山を登り、川を渡って、人々の苦労を見極められた記録である。

「慈済」は、功徳会と会員を結ぶ橋となったと同時に、大衆の愛の心を啓発するための大切な酵母になったのである。

一九六七年台風三十七号被災地支援のための募金

秋の終わりから冬の初めの頃は西北の太平洋の海水温度が低下するため、台湾に台風がやってくることは稀だ。ところが「慈済」創刊の年、立冬が過ぎたばかりの十一月十八日の昼前、猛烈な台風三十七号が台湾東部に上陸した。気象観測史上、一年の中で一番遅い時期に台湾を襲った台風であった。

史上最大風速の強風が花蓮を襲い、日本統治時代から残された伝統的な木造建物の多くが倒壊し


慈濟

参加慈済功徳會樂捐名單

●「慈済」創刊後の9カ月後、隔週誌から月刊誌に変更。毎号とも各委員が集めた募金金額をびっしりと記載しいる5元、10元と少額の寄付金を積み立てて、貧困者の救援資金にあてていた。

た。花蓮県で全壊や半壊した建物の数は三千七百棟以上に上り、最初の一時間で避難指示を受けた住民は一万人を超えた。

わずか数時間のうちに、台湾全域では死者五名、負傷者五十七名という大きな被害が出た。倒壊した家屋は一万軒以上に上った。冬になると、東北の寒い季節風が段々強くなってきた。自身も粗末な板間に住んでおられた證厳法師は、避難者の苦しみを感じられた。「天気はますます寒くなっている。貧しい上にさらに先の台風で被災した人たちは、この厳しい冬を無事に乗り越えられるだろうか」と心配された。

被災後の二日目の十一月二十日に発行した「慈済」第九号の一ページ目に、「台風三十七号猛襲　花蓮に甚大な被害　各界からの支援を期待　今こそ義援金に協力して被災者を救援しよう」と大見出しを書き、被災地の復興支援のため、大衆の協力を呼びかけた。

国民党花蓮県支部は大衆に金銭や衣服、食糧などの寄付を呼びかけた。功徳会は直ちにその呼びかけに応じて、一軒一軒回って古着を一枚一枚集め、三元、五元と寄付金を集めた。そして募集した支援物資の全てを国民党花蓮県支部に渡し、党支部から各市村のサービス隊を通して、被災者に配った。

義援金と支援物資を取りまとめて政府の統合運用のために渡したほかに、被災した慈済が長期ケアしている多くの人たちの援助もできればと、證厳法師は考えていた。ところが、その時はちょうど李阿抛さんの家を建てるサポートをしていて、それに必要な金額は四千二百元にも上ったので、長期ケアの人に援助する余裕はなかった。

そのために、声楽家の陳貞如はチャリティーコンサートを開催して義援金を募ろうと考えた。一九六八年一月十二日、功徳会と陳貞如が勤務する「民声日報」が合同で、中米劇場で二回にわたり、チャリティーコンサートを開いた。

中米劇場は花蓮市内で一番にぎやかな目抜き通りにあり、台湾東部最大のデパートのすぐ近くにある。コンサートの夜、当時二十八歳だった歌手、謝雷さんが大流行していた「苦酒満杯」を歌い、拍手喝采を受けた。そのほか、「小さな歌姫」と言われた徐珮さんや流行歌「氷点」で一躍有名になった新星、蔡一紅さん、そして新人歌手の高明さんなどの歌声が、辺鄙な裏山と言われた花蓮の人々を励ました。

この二回のコンサートで九千三百九十八元二銭の収益があり、功徳会はそれを分けて運用することができた。まずその一部を慈済がケアしている十九世帯に、百元から七百元の補助金として当てた。残りの三千九百十八元は台湾東部警備本部が実施する「冬季貧民給食」に寄付した。

毎月の五日と二十日に発行される「慈済」は、台風被害への支援者を募る役割を果たしたといえる。創刊から九カ月後の一九六八年四月、「慈済」は月刊誌に変わった。そして一九六九年七月、創刊から二年を経て「慈済月刊」は正式に「花蓮仏教慈済功徳会」から発行されることとなった。

慈善を人文という手段で記録し、伝えてこそ、理念を固く長く持ち続けられる。「慈済月刊」は誠正信実という慈善人文の礎となり、慈済人文志業の始まりとなった。これから未来の数十年間も、「恒久に、気迫を以て、慈悲喜捨の心で善行から退かない」との信念を持ち続け、この世の菩薩道を歩いて行こう。

●旧静思精舎の壁に毎月の救済活動の収支リストを張り出してある。ところが、リストが多すぎて貼り出す場所がなくなってしまった。「慈済」は創刊後、この一番重要な役目を請け負い、人々の信頼を得る責任を負った。

長寿雑誌「慈済月刊」を支えてきたもの

◎文・葉文鶯／写真提供・慈済濟花蓮本会／訳・慈願

「慈済月刊」をめくると、この半世紀の台湾の移り変わりが見える。
この一冊の長寿雑誌は、無数の功労者の努力によって支えられてきた。
永遠に止まることのない善の行動を記録してゆかねばならない。

呉麗玉は眼鏡を押し上げながら、ゆっくりと一冊の雑誌をめくっていた。向かいに座っている林慧美が、その雑誌の記事に興味を持って、呉麗玉に話しかけると、七十八歳の呉麗玉は話し始めた。

「ハリケーン・トラジーが襲ってきた時、被災者が村役場へ避難したけれど、椅子さえなかったのです。私は毎朝コック長に頼んで、熱い朝食を運んでもらっていました。私はここで生まれ育ったから、いろいろな融通が利いたのです。小学校の教室を一部屋借りさせてもらえました」と、自分でも信じられない程の行動力があった当時の救済活動を思い出していた。

「私はその時、どんな方法でやっていたのかしら。もしも、慈済に入っていなかったらそんなことはできなかった」。結婚した後、家の中で毛糸を編んでいた内気な呉麗玉は、静思語の「自分を軽く見てはならない。人には無限の可能性がある」という一句が自分を成長させてくれたと語ってくれた。

二〇〇一年の「慈済月刊」八月号には、前月の七月に花蓮と南投を襲った台風八号（ハリケーン・トラジー）の救助活動の記録がある。呉麗玉は花蓮の凰林に住んでいた。一帯で家屋や橋が倒壊し、家を失った被災者の臨時収容所を探さなければならなかった。普段から住民は、慈済人を自分たちの地域の人と見なして親しくしている。村長、町長と学校が組織する救助活動に、慈済も日頃から参加しているからだ。

その頃、呉麗玉は平日に組長の林慧美

●初期は新聞の体裁で発行していた。1973年8月に雑誌に改め、今日の「慈済月刊」の様式になった。

と訪問ケアをしていた。そして、台風八号の救済の時には、毎日バケツ一杯の水を車に乗せて、仮設トイレの清掃をしていた。

雑誌は文字や写真を通して記憶を呼び覚ます。心温まるストーリーは枚挙に暇がない。その時苦労を共にした皆が集まると、過ぎし日の記憶が呼び起こされるのだった。

雑誌の大半は出納簿記載することにより信用を得る

「慈済月刊」は、善人や善事や善法を伝えることに主眼を置いた仏教出版物である。慈済功徳会が創立して以来、その活動には多くの女性が参画してきた。それは、創立者の證厳法師が女性の力を見い出し、家庭の主婦たちに一日五毛銭を貯蓄して貧民病苦の救済にあてるよう呼びかけたことに始まる。これは一種の民間の社会保険に相当するだろう。

この本土型慈善組織に寄せられた浄財が誰から来て誰のために使われたのか、双方の人名と金額のすべてをこの雑誌に記載している。時とともに寄付者と救済対象が増加して、雑誌の大半が家計簿のようになった。米や医薬品、葬儀や生活の費用などの支出が、寄付による収入を上回っている。

「慈済」は慈済功徳会が設立された二年目に創刊され、以後十六カ月にわたり、救済したケースの人名と住所、支援に至った状況を詳細に記した。その中で野菜売りの女性を支援したケースを報道した。野菜売りの蘆丹桂さんのケースは、李時によって書かれた記事である。

李時の息子のクラスメートが破れた服を着ているので、お古をあげようとした時、野菜売りの母親、蘆丹桂さんが、緑内障を患っていて失明寸前ということを知った。李時は支援しようと、友達の間を駆けずり回って五百元を集めたが、これ以上のお金を捻出するのは無理だった。その時、ある尼僧が困っている人を

●５０年前の台湾は貧困と苦難に喘ぐ時代だった。知識も経済力も乏しい婦女たちが證厳法師に従って、毎日黙々とわずかながらの善を行った。女性の慈悲と柔らかな力が、社会に貢献し、異なる人生を展開していた。左から陳阿玉、李時、洪碧雲、陳雪梅、證厳法師、陳貞如。陳貞如は法師に追従した最初の善女。

助けているという噂を聞いたので、本当かどうか確かめに行った。すると、その尼僧、すなわち慈悲深い證厳法師は、すぐに宜蘭県の大きな町、羅東へ行って、手術して徹底的に治すように言われた。そして、蘆丹桂さんは五百元を持って羅東へ行った。退院の時、入院費、手術費、食費の請求書は二千六百元を越していたが、慈済功徳会が一カ月に生活補助費として六千元近くを支給したので、それでまかなうことができた。

李時はこの出来事をきっかけに慈済委員となる。創刊号に記載されている慈済功徳会のメンバーは、法師を含めて十名だけだった。その時、李時と陳阿玉の募金は毎月各自五十元、さらに二十二人の会員が一人について五円から三十元、そのほかの人は平均して一人十九元を募金し、合計四百三十五元が集まった。これが初期の状況だった。

三十五周年記念の時、記者のインタビューに応えた李時は「私はとても恥ずかしいです。慈済に対する借りは一生かけても返せません」と言って、蘆丹桂さんの支援のいきさつを話した。記者は「ただ一心に歩いてきた三十五年」と題し、「慈済月刊」四一三号で報道した。

早期の頃、彼女を含めた古参委員はいつも精舎に出入りしていたので、尼僧たちが炒った塩を豆腐にかけた食事を取るなど、質素倹約で、自給自足の苦難な暮らしをしていたことをよく知っている。それでも證厳法師は、貧しい人たちが苦しい生活から抜け出して自立できるように、また病気の人が治癒できるように世話しておられた。

證厳法師の重責を少しでも担えるように、李時は募金集めに全力投球した。北へ南へ奔走しては、慈済について話し、慈済の善なる種を蒔いて、枝葉が茂り、発展するよう努力してきたのだった。

「慈済月刊」を手に、募金に走る

「慈済月刊」を読んだのがきっかけで、慈済に加入して来る人は少なくない。話すのが苦手でも、募金をお願いする時に「慈済月刊」を持って行くと、説明しなくても慈済のしていることをよく理解してもらえるからだ。

七十一歳の林慧秀の母は、慈済功徳会が設立した二年後に募金を始めた。その時、高校生だった林慧秀は母の募金を手伝っていた。二十九歳で結婚した後に慈済委員になった時に授かった委員番号は

●早期の支援ケースについて、支援を行った日時や家庭の状況を「慈済月刊」に掲載した。これを読んだ心ある人が手を差し伸べるようになった。

「九十」で、娘の時から祖母になるまで慈済の道を歩いたことになる。

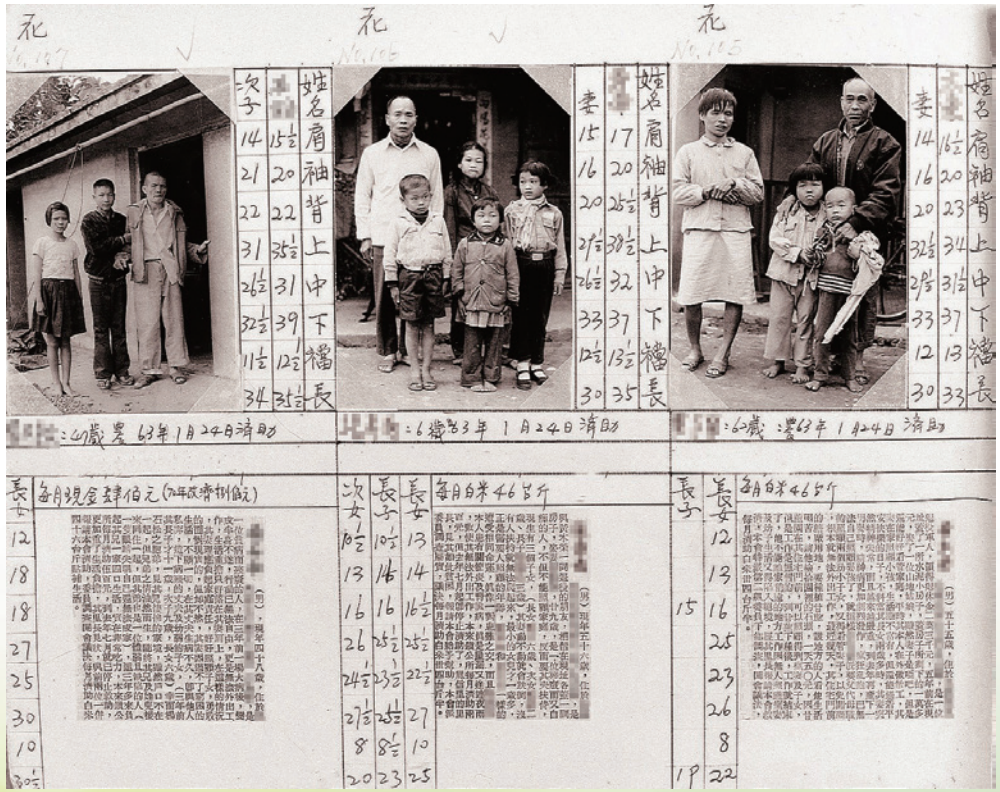
昔の台湾には今のような個人情報を保護する法律はなく、毎月、新しく支援対象となった人の名前とその内容について掲載していた。それを見て、本当かどうかを確かめに行く人もいれば、その人を助けに行かなかったことを悔やむ人もいた。真実の報道は、多くの人に堅い護持の信心を与えていた。

一九八一年のことだった。十年以上静思精舎の印刷を請け負ってきた印刷所が、人手不足のため数カ月も期日通りに印刷できなかった時期があり、證厳法師は大変心配された。台北、高雄、台南の慈済委員にとって「慈済月刊」は会員から募金を募ったり、新しい会員を募集する際に、とても大事な役割を担っていたため、出版されないことの影響は大きかった。

證厳法師は、発行部数が一万二千部を超える「慈済月刊」の発行が遅れれば、慈済委員が募金を振り込むのに大きく影響すると心配された。それ以外に、会員数の増加にしたがって印刷量も膨大になるため、もっと大きな印刷所を見つけなければならなかった。その時、法師はお詫びの掲示を印刷し、連合会の席上で、台北の慈済委員に印刷所を探すよう指示された。

一九八六年、普門文庫を慈済に寄付した因縁で、慈済文化センターが台北で設立された。創刊以来、ずっと花蓮で印刷して二十年になる「慈済月刊」は、発行部数の増加から印刷業務を台北に移転することとなった。

その年の七月、花蓮慈済病院がオープンし、一躍慈済の知名度が上がると、国



内外から多くの支持者が絶えず行き来するようになり、「慈済月刊」の供給は需要に追いつけなくなってゆく。

「慈済月刊」は、慈済功徳会の慈善事業の足並みにぴったりと沿って成長してきた。だが、限りある誌面では、残念ながら無数の感動的な物語を一つ残らず掲載することはできない。

證厳法師はお年寄りと子供に対してもよく配慮している。「童心映月」というコーナーを設けて、仏法を三歳の子供でも理解できる内容にしたり、親孝行の話を載せたりした。また、「草の根の菩提」というコーナーでは、環境保全活動に参加しているお年寄りを取上げ、年を取っても大いに社会のために役立っているストーリーを掲載している。

庶民の力と台湾の美談を伝える

慈済創立から五十一年目に邁進し、證厳法師は「前塵を顧みて」という文章を「慈済月刊」に寄せた。その中で、何か一つ志業を始める度に、慈済委員と会員は支持してくれたが、一九九一年に始めた中国救済では、多くの反対の声が上がったことが書かれている。

一九九八年の元旦、大愛テレビ局が開設される前まで、「慈済月刊」と、一九九六年九月に創刊された隔週誌「慈済道侶」が、読者とコミュニケーションを取る重要な役割を演じていた。

「慈済月刊」三〇〇号に、「法師随行期」「中国風災チャリティーバザー座談会」という記事がある。その中に、高雄で證厳法師が大陸救済を決定したことについて、「台湾も救済し終えていないのに、中国まで……」と慈済委員の間でも意見が分かれたという記載があった。反対意見が多く、中国での救済活動を展開することはできなかった。

證厳法師はとくに高雄の慈済委員を招集して、「今日私は皆さんにお願いをしたいと思います。偏見をおいて、共にこの神聖な任務に団結して努力してゆきましょう」と呼びかけられている。同じ号に掲載された「法師随行記」では、中国支援隊の出発前夜、李宗吉がメンバーの渡航費を受け持つと言うと、證厳法師は「救済活動が始まると志願する人が増えます。ですから交通費と食費は各自負担とし、浄財は一元も漏らさずに現地支援に当てましょう」とおっしゃった。その言葉が、以後、ボランティアが支援活動に参加する時の規律となった。

臓器提供、骨髄バンク、献体の問題では、ボランティアが率先して、中華系住民や仏教の伝統的な観念を打破して、社会から受け入れられるようになった。

生活が豊かになるにしたがって、台湾

ではゴミ問題が深刻化していた。それを心配された證嚴法師は、台中新民商工学校で一九九〇年八月、「拍手する両手で環境保全に努めましょう」という演題で講演された。「拍手する両手」とは、環境保全の重要性を説くと人々は拍手するが、その拍手する両手を実際に動かして環境保全活動に参画しよう、という意味である。こうして、環境保全活動は瞬く間に台湾全土に広がっていった。その年の九月、證嚴法師が台中へ行脚に行かれた際、台中のボランティアたちは、資源回収で得た所得を献金した。

十年前。「慈済月刊」は環境保全に呼応して、電子化し、紙の使用を減らした。しかし、古参委員たちは今でも古い「慈済月刊」を読んでは、かつての様々なことを懐かしく思い出す。とくに證嚴法師の開示は温故知新であり、いつまでも褪せることなく、いかなる時にもすぐに役に立っている。

メディアの形態が絶えず新しくなっても、その内容の良し悪しは、やはり報道する対象である慈済人の行動によって決まる。「慈済月刊」を発行して五十年、この長寿雑誌の背後に無数の絶え間なく善行に努力し行動する人々があったからこそ、永遠にストーリーを書き下ろすことができる。

●【表紙の移り変わり】「慈済」の表紙は、最初の新聞の体裁（最上段左）から、観世音菩薩の迷津慈航（最上段右と上から2段目左）、実社会での救済（上から2段目右）、見守りケアの写真など、仏教の世界と現実社会を取り上げている。10年前からは電子化され、印刷部数を減少し、環境保全に呼応している。だが、印刷された「慈済月刊」を希望する読者もまだ多い。

母の子育て指南

◎花蓮　林思彣

◎訳・黒川章子

小さい頃、私と弟が言うことを聞かないと、母はこの雑誌を開いて読んでくれました。私の反抗期には、部屋の鏡に上人の言葉を書いて貼ってあることもありました。その頃はまるで「呪文」のように思えましたが、いつも見ているうち、ふいに気持ちが伝わってきたのです。母に心配ばかりかけていた頃、「両親に安心してもらえる子供には福があります」という言葉を見た時、私は涙が溢れてきました。私は母から逃げているだけで、何も大切にしていなかったと分かったのです。母は一人で私と弟を育て、辛いことも心にしまい、この雑誌を読み聞かせることが唯一私たちとの共通の話題でした。

「両親は子供の模範でありましょう」「菩薩の心で自分の子供を大切に愛しましょう」。上人の言葉を自分に言い聞かせ、私たちの成長を待ってくれていたのです。

私が大学に入学すると、母は慈済青年社（慈済の学生ボランティアチーム。略称は慈青）に入るよう勧めてくれました。そこで多くの仲間と出会い、奉仕をしながら、時間があれば母を見習って「慈済月刊」を読んでみました。各地の菩薩の皆さんの行いを知り、その心情を思いやるうちに、自分も今を大切にしていこうという気持ちになりました。もう母に「呪文」を書いてもらう必要はなく、私が好きな言葉を見つけて、分かち合う番です。「慈済」が繋いでくれた母との絆を大切にし、これからもよい親子でいたいと思っています。

月刊誌が繋ぐ会員との絆

◎日本　張秀民

◎訳・黒川章子

日本で人と会話をするとき、宗教を話題にするとよい印象を持たれませんが、「慈済月刊」があると興味を持ってもらえます。日本人と結婚した方は、友人との集まりで「慈済月刊」の中の上人の言葉や記事を紹介しているそうです。時には、日本在住の台湾人が花蓮を旅行した時に精舎を訪れて住所を残していったと本部から連絡を受けて、「慈済月刊」を送ることもありました。住む場所は違っても、同じ雑誌を読むことで繋がりを感じられるものです。

少し前のことですが、一九九四年に名古屋で中華航空機墜落事故が起きた時、東京支部の担当者はすぐに連絡を取り合い、翌日には支援とケアに向かいました。また、同時に「慈済月刊」で募金を呼びかけることができました。一九九九年の九二一台湾中部大地震の時にも、「慈済月刊」に掲載された記事で被害の様子を知った日本の方たちから、すぐに多くの募金が集まり、「希望工程（慈済の学校建設援助計画）」の支援をすることができました。

インターネットのまだない時代に、文字による報道はどれほど大きな支えとなったことでしょう。一九九二年、私たちは隔月誌の「慈済日本」を創刊し、日本での活動を紹介するようになりました。当時群馬県に住んでいた私は、自宅から日本支部がある都内まで、車で四時間の道のりの間に原稿を仕上げたりしたものです。リサイクル活動、老人ホーム訪問、読書会など、どこに行くにも二冊の雑誌を持参しています。離れていても、雑誌が結ぶ絆のおかげで会員同士はよい関係を続けることができ、大変ありがたいと思っています。

文字に霊感を尋ねて

◎シンガポール　楊淑元

◎訳・黒川章子

一九九二年、夫の仕事によりシンガポールへ渡りました。子供が特別進学クラスに入学したので、私もそのお手伝いとして教材を作るボランティアを始めました。その時、「慈済月刊」は分かりやすく仏教の話を学ぶことのできる、数少ない教材でした。なかなか手に入らず、宝物のように思えました。

そしてシンガポールでも「慈済世界」を出版することになり、私も執筆を手伝いました。最初は何をどう書いたらいいのか分からず、いつも「慈済月刊」を読んではその中の言葉に感化され、少しずつ成長することができました。今の若い人たちは、写真は好きですが、あまり活字を読みません。支部でも意見が分かれますが、私は印刷された「慈済月刊」が好きで、頁をめくり、印象に残った文章を何度も読み返すのが楽しみです。

編集の仕事にも携わりました。一番の思い出は、インドネシア・バタン島の子供について書いた文章が「慈済月刊」に掲載されたことです。顔面に腫瘍を患ったその子をシンガポール支部が支援して、花蓮慈済病院で手術を受けることになったという記事です。手術は成功したのですが、残念ながら完治には至りませんでした。しかし、その子にとって花蓮での日々は、わずかな間でしたが、美しい思い出となったようです。記録として残すことができて、私はとても光栄に思っています。

幼少期に根づいた善の心が花開く

◎タイ　王鐘賢

◎訳・黒川章子

私は母親の影響で「慈済月刊」を読んで大きくなりました。もちろん漫画も好きでしたから、蔡志忠の老子、荘子、「萬法唯心」なども読みました。高校で『静思語』に触れ、菩薩の心を少し垣間見たような気がしました。

大学で慈青社を設立した時も、その拠り所となったのは「慈済月刊」でした。それなのに、タイに渡り父の工場を任された頃は、うまくいかず、心労が重なったせいか、慈済から心が離れていったのです。そして二〇〇七年、タイの青年達と共に花蓮を訪れる機会がありました。その時、上人は、「名もない草でもハーブと一緒に飾るとよい香りがするもので、雑草と一緒にすると枯れてしまうのですよ」と言って、私たちを励ましてくださいました。私たちは精舎で温かく迎えられ、たくさんの感動を胸に抱いて帰国しました。

それから数年の間に、タイ支部はボランティア訓練チームを組織し、国連と共に難民への施療活動を実施しました。他の団体とも連絡を取り合い、世界中の難民に施療を拡大していく予定です。これもすべて幼少期に「慈済月刊」を読んで、善の精神を身につけたおかげだと思っています。

作文の参考書として

◎ミャンマー　王棉棉

◎訳・黒川章子

私はビルマで報道記者兼カメラマンをしていますが、「慈済月刊」は中国語を学ぶための貴重な参考書となっています。幼い頃からミャンマーの現地教育を受けた私にとって、中国語を書き綴ることは難しいからです。小さい頃は、中国仏教系のお寺で開かれている無料の中国語教室に通ったのですが、周囲の人との会話もままならず、行ったり行かなかったりでした。慈済に入会し、取材の撮影を手伝うことになり、最初はマレーシアからきたボランティアの方と中国語で話していましたが、何度も教えて頂いてやっと通じる程度でした。それから「慈済月刊」を読んで語彙を増やし、文章をどのように構成したらよいのか考えるようになりました。夜間学校にも通って中国語を学び、やっと自分の言いたいことを適切に表現できるようになりました。とくに「衲履足跡」の中にある上人と客人との対話はとても勉強になります。言葉に込められた意味を深く考えることを教えて下さいました。原稿を書く時も、内に気持ちを込めるよう意識して言葉を選ぶようになったことで、今では私の中国語を笑う人は誰もいません。私も少し進歩したような気がしています。

学習は永遠に続きます。私が頂いた法名は「慮綿」ですが、綿密に思慮を重ねて丁寧な報道をするように、との願いを込めていただいたのだと思っています。ミャンマーの農民には「毎日一つかみの米を蓄えて布施する」習慣があります。このことを慈済の皆さんに伝えるため撮影をしたことを、とても光栄に思っています。これからも、気持ちを新たに善の物語を探し続け、全世界に届けていきたいと思っています。

出会いは一瞬の美しさ
感動はいつしか生涯の志に

一つまた一つ、真実を語る美しい善のストーリーに魅了され、私は慈済の世界にのめり込んでいった。月刊誌の仕事に携わりながら瞬く間に過ぎた三十年であった。

◎文・王慧萍（《慈済月刊》編集長）訳・閻麗妮
写真・楊秀麗と慈済花蓮本部

私は就学のため高校の時から家を離れていた。帰省すると、いつも応接間のテーブルに薄い雑誌が置いてあり、その雑誌の表紙の「卍」のマークが目に留まった。「慈済」と書いてあった。

母は「毎月百元の寄付をしているのよ。花蓮に人助けをしている法師様がおられて、この月刊誌を届けてくださるの」と言った。毎月その月刊誌にびっしりと記された寄付者のリストを念入りに見て、母は必ず家族の名前を見つけるのだった。こうして私と慈済とのつながりがこの月刊誌から始まった。

興味は仏教の探求へと

大学時代の私は老荘思想に夢中だった。一九八七年の夏、大学院の入学試験で私が目指していたのは、中国哲学を研究の中心とする中国文学科であった。補欠で一番となったが、残念ながら入学することはできなかった。やむを得ず短期

の仕事を探し、来年また挑戦しようと決めた。

「慈済ですって？　私がずっと寄付を続けて来た慈善団体よ。そこで働くのはいいことだわ。世の中のためになるのだもの」と励ます母に付き添われ、私は台北市長安東路の「普門文庫」へ行って、慈済文化センターの記者の採用面接を受け、採用された。当時の陳慧剣編集長には心から感謝している。仏教のことも分かっておらず、大学を出たばかりの私に、またとない機会を与えてくれたのだ。これが人生初めての仕事であった。

一九八七年七月一日は私が初めて慈済に足を踏み入れた日である。当時慈済は設立して二十年を迎え、七年の歳月をかけて建てられた花蓮慈済病院も、一周年記念日を迎える準備をしていたところだった。その記念すべき年に入った新人記者の私は、病院建設の縁の下の力持ちであった「栄誉董事」と呼ばれる、幹部ボランティア達の伝記を書くことになった。隔月の「慈済道侶」と月刊の「慈済月刊」に掲載される記事だった。

翌年八月、花蓮慈済病院は台湾大学付属病院から十数名の医師を迎えた。開業二年目になり医者が不足するという厳しい状況を救う強力なサポーターとなってくれた。私は幸いなことに「慈済月刊」の取材を通して、若きエリート医師である陳英和医師、郭漢崇医師、簡守信医師と李仁智医師を訪問するチャンスに恵まれた。彼らは活気にあふれ、はるばる台湾東部で人命を救うとの理想に燃えており、私はその精神に心から敬服していた。

取材しながら一つまた一つと真実を語る美しい善のストーリーに魅了され、私は慈済の世界にどんどん引き込まれていった。老子と荘子の哲学を探求したいという気持ちは、次第に仏教への興味に変わった。そして「一時的」のつもりだった「慈済月刊」の記者の仕事も、楽しさのあまり一年また一年と延びた。そして慈済に入って六年目の一九九二年、「慈済月刊」の編集者となった。

会員との信頼関係を築く目的から人文的刊行物へ

私を慈済に入るよう導いてきたこの月刊誌は当初、会員との信頼関係を築き、「誠正信実」という慈善の理念を実践することを発行の目的としていた。だが思いがけず、この月刊誌によって、一九六〇～一九七〇年代の台湾の辺境に生きた貧しい人々の様子が、記録として残される

こととなった。

「慈済功徳会の設立は貧困者を救援するためなのに、なぜ救援すればするほど増えるのだろう?」。これは、慈善活動を始めた頃、證厳法師が抱えていた疑問である。貧困に至る原因を突きとめるため、證厳法師は、社会から取り残された片隅を自ら訪ね歩かれた。日めくりカレンダーに鉛筆や青や赤のボールペンや毛筆で細かく綴られた文字は、山を越え、川を渡って、人々の苦しむ姿を見てきた證厳法師がお書きになった実際の記録だった。それを侯慰萍や陳貞如ら記者たちが記事として書き起こし、「慈済月刊」に掲載したのである。

證厳法師はこの世を自分の研究室だと見なされていた。だとすれば、早期の「慈済月刊」に掲載された文章は、上人が発表された研究論文とも言える。一九六〇～一九七〇年代の交通が閉ざされた台湾の僻地に暮らす貧困者や社会的弱者の実状について、詳しく言及されている。

一九八〇年代、花蓮に病院を建てるため、慈済は人々に向けて共に福田を耕すよう呼びかけた。「慈済月刊」も会員との信頼関係を築くことからその目的を拡げ、続々と「隨師行記」「静思晨語」などの特別コラムを増やしていった。私が楊歆師姐(徳清師父の出家前の名前)から編集の仕事を引き継いだとき、「慈済月刊」は文化的な内容が充実した読み物で、その上慈済ボランティアにとって欠かせない大切な拠り所となっていた。

慈済人文志業センターの王端正執行長には心から感謝している。「慈済月刊」の編集長に任命されて不安でいっぱいだった私に、明確な目標を示して下さったのだ。「心を浄化する霊水として世に行き渡り、社会の平和の支柱となること。そして苦しみの声に耳目を傾けること」。さらに人々が心の落ち着きを欠いている時代に、「邪念に惑わされず真理に至ろうという心を保つ」役割を担っていかなければならない。

二〇一七年の七月で私が慈済に入ってから三十年が過ぎた。思えばあっという間であった。「慈済月刊」はもう五十歳だ。非営利団体の雑誌として半世紀を歩み、人々の心を善の方向へ導く清流メディアの役目を今も堅く守っている。そして次の五十年のスタートラインに立った今、歴史の事象を検証し、慈済を記す大蔵経となることが、編集者や取材者全員の永遠なる理想と願いなのである。

平凡な人でも非凡なことを成せる

一見凡庸に見える人でも、
偉大な力を発揮することができる。
低収入の住民や、戦火から逃れてきた難民でも、愛があれば奉仕ができる。
これこそ平凡の中の非凡である。

◎文・葉子豪　訳・周賢農

私は何度か真善美ボランティアに招かれて、取材レポートの書き方について講演した。その都度、私はこう言った。文章の内容はどんな美辞麗句にも増して重要だ、と。よい物語をありのままに表現するだけで、自然に人を動かす力が生み出されてくる。

「貧しさの内にも富あり」を捉えた取材

二〇〇六年、私は台北市文山区に住む手足に障害のある七十歳の老婦人を取材した。彼女は幼い頃から小児麻痺を患い、両親が亡くなった後は一人暮らしをしていたが、障害のため外で働くこともできず、加えて年をとり体力も衰えたので、社会局の手配で老人ホームに入居することになった。そこで社会福祉士が彼女の事情を慈済に報告し、サポートを申請した。

老婦人はラジオ放送で上人のお諭しを聞き、今の自分は一人でも生活できるからと、慈済の救済を辞退した。さらに政府からもらった補助金の一部を義援金として慈済に寄付してくれた。私が取材のため彼女の家を訪れた時、手足とも曲がった彼女は、四坪の広間に横になって休んでいた。その姿を見て、一瞬躊躇した。彼女が高齢であるのを考えると、長期にわたる取材には耐えられないのではと思ったのだ。そこで考えを変えて、お世話係の林瑞芬に老婦人の物語を話してもらう

ことにした。話を聞くうちに分かったのだが、慈済委員である林瑞芬もまた低所得層だということだった。市政府の手配で一人暮らしのお年寄りの世話をし、生活補助を受けているそうだ。

それを知った私はふと慈済に関する噂を思い出した。「慈済の制服を手に入れるには百万元かかる」という噂だ。真実を知る人は嘘だとすぐ分かるが、事情を知らない人は容易に信じてしまう。

「私が息子の学校で手続きをした時、息子が『お母さん、僕達が低所得者だと人に言わないで』と言ったのです」。林瑞芬の夫はセメント工夫で安定した収入があったが、友達が飲酒運転する車に乗り、車もろとも谷に落ち、重傷を負った。夫は七年もの寝たきり生活の後、亡くなった。後に残された林瑞芬は一人で三人の幼い子供を育てるのは負担が重いので、低所得者の申請をし、子供達の学費も補助された。

毎月の収入は法律で定められた基本給に達していないが、林瑞芬はとても満足している。彼女がまだ慈済に関わっていなかった時、あるボランティアが彼女の事情を慈済と家庭援助センターに知らせようとしたが、林瑞芬は婉曲に断わった。もうすでに政府の援助を受けているから十分だという理由だった。

その後、彼女は訓練を経て正式に慈済委員となった。さらに奉仕を行う縁に恵まれ、長期間にわたって一人暮らしのお年寄りを世話したり、政治大学の慈青社（慈済の学生ボランティアチーム）の学生たちが団地の低所得家庭の子供達のために行っている補習を手伝っている。大学生が「瑞芬ママ」と呼ぶ林瑞芬は、まさに「貧しさの内に富あり」の模範だった。

●林瑞芬（一番右）は慈青に協力して貧困家庭の子供達を世話している。彼女自身、正式に慈済委員になってもまだ低所得層だった。志がありさえあれば、貧富を問わず、人徳という才能を発揮することができることを証明している。（撮影・林静芳）

大愛精神は仇敵を超越する

人々を感動させるストーリーは、台湾だけではなく、八千キロも離れたヨルダンでも発生している。

「私は難民二世なのですよ」。ヨルダンのボランティア、リリの人生は近代中東史の縮図であるとも言える。彼女の父はアルメニアから異国へ渡って来た。一九二〇年代、トルコの迫害から逃れるため、英国統治下のパレスチナに来たのである。一九六七年、彼女が二十三歳の時ヨルダンの作家に嫁いだ。ちょうどこの年、彼女が生まれ育った故郷エルサレムは、イスラエルが支配する「外国」となった。

「あの時は避難するため、皆家の鍵だけを持って家を飛び出しました。きっとまた帰って来られると思っていましたが、なんと戦争が終わっても戻ることはできませんでした」。イスラエルとアラブ諸国の六日戦争の後、リリと夫はヨルダンの首都アンマンに定住。十年後やっとイスラエルへの出入国ビザが取れ、エルサレムに帰ることができた。

彼女がかつての我が家の扉をノックした時、中から出てきた新しい屋主はユダヤ人だった。「すみません。入って昔の寝室を見てもよろしいでしょうか」と尋ねると、「だめです」と即座に断られた。期待に胸を膨らませていた里帰りの旅も、生涯で残念な思い出となった。

リリはもう一つの出来事を語った。ある日、再びエルサレムに帰った時、なんとパスポートを床の上に投げ棄てられたのだ。原因はイスラエルの警備員が彼女に出生地を聞いたとき、「パレスチナのエルサレムです」と答えたからだという。

彼女の話の中で一九六七年の事変は今も記憶に新しい。その不満を彼女はキリスト教の信仰と慈済精神のおかげで、愛を以て乗り越えたのである。「私はユダヤ人を恨みません。信仰が私に『愛はすべてに勝る』と教えてくれたのです。聖書も、人々に手と手をつなぎ合い一緒に愛に向かって進むことを教えています」

リリのストーリーにはアルメニア人の苦難とパレスチナ人の悲運があった。戦火を逃れた数千万人の人々と同じように、迫害者をののしり、世界で不公平な待遇を受けていることを恨むこともできたが、彼女は一群の青と白の制服を着た慈済ボランティアと一緒になって、シリア難民に暖かい関心を寄せることを選んだ。でもこれが原因で、同胞達からののしられることもあった。

●リリ（左）は身を以て中東戦争の動乱と離散の日々を体験したので、シリア難民の苦境がよく分かる。支援活動の現場では、年長者として常に穏やかに、思いやりをもって相手の苦情に耳を傾け、いたわり慰める。（撮影・蕭耀華）

「ヨルダンにも大勢貧しい人がいるのに、なぜ君達はシリア人を助け、自分の同胞を顧みないのか？」。二〇一二年の末、ヨルダンの慈済ボランティアが国境の町でシリア難民に食糧を配付していた時、一人の青年が会場に押しかけてきて、大声で怒鳴った。

一緒に配付活動を行っていた慈善団体、アルタフルのメンバーは、急いで青年に歩み寄り制止した。この時、リリはあの孫にも等しい年齢の青年に、こう説いた。「今週はシリア人の世話をしますが、来週のスケジュールも決まっていますよ。地元のシリア住民に配付をするの」

七十歳近い彼女は青年をこう諭した。「もちろん私たちは地元の人々にも関心を寄せています。でも考えてごらんなさい。あのシリアの人達は住む家をなくし、肉親も失ったんですよ」

食糧配付活動の時に発生したこの予想外のハプニングに、リリはたじろぐことなく、こう言った。「ヨルダンには『愛の家』という別称があります。なぜなら私達は周辺五カ国、レバノン、エジプト、シリア、リビア、パレスチナの難民達を受け入れているからです」

他人を責めず、受け入れる

リリは奉仕活動中も敬虔なキリスト教徒であり続け、また慈済人でもある。七十歳を超えた彼女は苦労をいとわず、陳秋華ら慈済ボランティアと一緒に取材や食糧配付、病人の見舞いなどの活動に参加している。そして娘が母を亡くしたシリア人の孤児を育てることを全力で支持した。その子は「アミール（酋長、王子の意）」と名付けられた。

二月に台湾で開催された音楽会「国際大愛、全ての人の心に蓮の花を」で、私は一歳の誕生日を迎えたアミールの写真を見た。その天真爛漫な表情に誰もが魅了されたにちがいない。私はこう信じている。愛に満ちた環境で成長すれば、将来きっと愛を知って他人に奉仕し、感謝の気持ちを持った人になれるだろう。

林瑞芬とリリを見ていると、「賢明な人は黙って自ら歩く道を開く」という言葉を思い浮かべる。二人とも平凡な人物である。しかしその利他の精神と見返りを求めない偉大な思いやりが、非凡なる光芒を四方に放っている。

（慈済月刊六〇七期より）

朝日のように鮮明な記憶

◎文・李委煌　撮影・蕭耀華　訳：性諒

他人の目には、北朝鮮は神秘で閉ざされた国の見本のように映る。だが、私が触れ合った北朝鮮の人々は、純朴で、どんな苦労にも耐えて必死に生きる勤勉な人々である。

これまでに多くの国を取材で訪れた。どれほど辺鄙で遠い農村も、いつか再び訪れることはできる。しかし、北朝鮮を離れるときは、この人たちにまた連絡することは二度とできないと感じていた。

私はこれまで十年以上にわたり、ボランティアと一緒に北朝鮮の被災地の救援活動に参加してきた。もう五回参加している。北朝鮮に行くなど、ほとんど聞い

たことがない。五回の北朝鮮訪問の経験は、私が三十数回にもおよぶ海外の被災地救済の取材をしてきた中でも最も特殊で、心に残るものとなった。一生忘れられない神秘的な国である。

世と断絶した国で、国民の真心を探り出す

今でも覚えている。五回目に北朝鮮へ行った時、配付活動がまだ終わってないうちに、中断させられたのだ。なぜなら、北朝鮮の人にとって偉大な指導者である金正日が急逝したからだ。そのため、国内の外国人はすぐに北朝鮮から去らなければならず、海外にいる北朝鮮の国民は、できるだけ早く帰国して、国家指導者の葬儀に参列することになったのだった。

その日の正午、各農村の拡声器がこの消息を放送すると、多くの婦人は悲しさのあまり天に向かって叫び、頭を地にすりつけ、ほとんど気絶しそうなほどだった。そして、私たちの側にいる随行員も悲しみのあまりぶるぶる震えている。私は、指導者が急逝したことに彼らが示す哀悼の姿を見て、作り物ではないと感じた。

北朝鮮の人は自分たちの国と韓国を、同じ「朝鮮」だと考えており、南側に位置する韓国を「南方」と呼ぶ。一方、韓国の人は北朝鮮を「北の韓国」と呼んでいる。

多くの国や都市を取材してきたが、携帯電話を没収されたのは、北朝鮮に入国する時だけだ。北朝鮮を出る際、ようやく返してもらえた。だから北朝鮮で取材をすることは、この世と断絶するようである。もし滞在中に外と連絡しなければならないことがあれば、ホテルで高い料金を払って国際電話をかけるしかない。

この国に来るたびに、まるでタイムトンネルに入ったような気持ちになる。平壌の数多くの象徴的な建物を除けば、庶民の生活には長年大きな変化がない。首都の道路は広くて清らかである。しかし、車はあまりないようだ。高層ビルが多くあり、近代的な都市のように見えるが、そこに住む人はごく少数だ。北朝鮮の人の住宅は国から配給され、人々は住む家があることを誇らしく思っている。しかし、多くのビルにはいつも電気がない。

インターネットは現代人の生活様式を変えたが、この国に住む多くの人は、インターネットを使うことを禁止されている。北朝鮮の人々は、そのまま世と断絶した「理想郷」を保って生活を続けてい

るのだ。

インターネットを使えないので、北朝鮮の人は地球のほかの国のことを知らない。国際情勢や歴史について、幼い頃から特定の解釈あるいは歴史観を与えられているので、国民の口ぶりと考え方はほとんど一致している。

慈済は、地球上にわずかに残されたこの共産国家で、長年にわたって「直接的、重点的、実質的に」という配付活動の原則を守ってきた。双方が何度も打ち合わせをした結果、互いに尊重し合って、救援活動をスムーズに行うことができるようになった。

北朝鮮の国内で、多くの慈済ボランティアと村民が配付会場の農場で集まって、村民に大きな包みの米を手渡しすることを許可されたのは珍しいことだ。また、農家への訪問も許可された。外国の政府関係者や慈善団体の中では前例がない。慈済はこのように大規模な救援活動を通して北朝鮮の人々と触れ合い、交流することができた。警備された中での公の場であったが、彼らの表情には、誠実さと真心がはっきりと示されていたと感じた。

北朝鮮の友を懐かしみ情勢に関心を持つ

北朝鮮の人は自尊心が強く、勝ち気な面を持っている。彼らは、長年にわたって天災に見舞われ、穀類生産量が減

●前国家指導者の金正日が急逝したとの訃報を聞いて、人々は天に向かって泣き叫び、地面に頭をすりつけて悲しんだ。平壌市民が総出で列に並び、そこかしこに見られる金日成、金正日の牌坊の前に、一人一人近づいて黙祷していた。

少し飢饉に苦しめられてきた。海外援助を求める反面、国の困窮した様子を世界に知られたくはない。このように、政治的な建前が第一という国家で、最も苦しい目に遭っているのは、貧しい民衆である。

慈済は慈善志業の救援活動においては政治には干渉しないことを原則としている。本当に関心を持つべきことは、民衆や随行員、通訳、情報員に至るまで、知り合った人々の暮らしについてである。何日か付き合う中で、私たちに対する彼らの警戒心も和らいだようだった。

そこで知り合った若い通訳者との会話を今でも覚えている。台北で家を買うのは容易ではないことなどの話題のほか、「共産主義は国民皆が平等でいられる体制だ」という言葉を彼から聞いた。彫りが深く体格もがっしりとしていて、韓国の人気タレントにも劣らない外見をしている。彼らは、もちろん資本主義国家が進んでいて、豊かなことを知っている。「私は、貧富の差があることはよくないと思います……」。そう語る彼に対し、実は私もその点については認めざるを得ないと感じた。

政治や思想を別にすれば、北朝鮮はとても魅力がある国だ。とくに農村には素朴な美しい風景が残っているのは忘れられない。稲の成長促進剤を配付する時に、大きなバケツいっぱいの薬剤を、どうやってトラックに運ぼうかと考えていると、村人がすぐに木の板とクヌギのベルトを持ってきて、大きなバケツのベルトを掴んで引っぱりながら、あっという間に運んでくれた。

北朝鮮は長年国際社会の制裁を受けているため、生活必需品や燃料の入手が極めて困難だ。だがこの状況に対して、勤勉で賢い北朝鮮の農民は、困難に直面しながらも挑戦する方法がある。例えば、慈済の配付活動の会場にはいくつかの農業用車両が置いてあるが、その車輪の皮が摩擦によって溝がなくなり、滑りやすくなっていても、車輪の皮を補強して使う。また、車のエンジンのメカニズムを変え、まきを燃やして駆動させる。私達はそれを見て、開いた口がふさがらなかった。

今の北朝鮮の民衆の貧しい状況は、まるで一九五〇年代の台湾と同じである。證厳法師は彼らを愛おしんでいるだけではなく、彼らの質素倹約に努め勤勉に働く姿に共感され、彼らがこの難関を乗り越えられるよう、できるだけ助けてあげたいと願っておられるのだ。

私は、慈済の記者として、ボランティ

●北朝鮮では生活必需品と資源が長年不足しているうえ、旱魃により農作物が減収し、どうしても国際援助に頼らなければならない。だが、楽観的で団結心の強い北朝鮮の農民は、心配そうな顔は滅多に見せない。

アたちと一緒に北朝鮮を五回訪問する機会があった。そして北朝鮮の通訳や情報員と友達になり、互いにメールアドレスや電話番号、勤め先の住所などを交換した。だが私は、この国を離れた後、彼らと再び連絡を取ることはできないことを知っている。私は住所宛に贈り物を郵送し、メールも送ったことがあったが、予想通り相手からの返事はなかったからだ。

私は、当時二十歳くらいの安という若い女性通訳者を思い起こす。彼女は中国語の通訳員だったが、私たちは彼女の中国語をあまり理解できなかった。最終日、空港まで送ってくれた彼女は、はるかに遠くから私たちに向かって手をふり、涙を流していた。この別れの意味について、彼女はよく分かっているのだと思った 。将来再会する日はないと思っていたのだろう。

二十年来、数多くの海外の被災地で慈済が行っている救援活動や訪問ケアを取材してきた。どれほど辺鄙で遠い農村であっても、再び彼らを訪れることはできる。だが、北朝鮮という国だけは、一歩そこを出ると、もう二度と連絡することができない。「ユートピア」への道を探しても、到達することはできず、切なさがつのるだけである。

ここ数年、北朝鮮に関する報道が多い。私は、ただ黙々と情勢に関心を持つしかない。かつて彼の地で知り合った多くの人々。みなさん、お元気ですか。

月刊撮影記 TOP 50

「撮影は単に思考と現実を交流させるものであるだけでなく、創作芸術でもある」―アンセル・アダムス（Ansel Adams）

「撮影は微かな声であるが、時には一枚、あるいは一組の写真が、我々の注意を喚起することができる」―ユージーン・スミス（W.Eugene Smith）

「撮影は世界で最も簡単なことであるが、、それをまともに見せるには、極めて複雑なことでもある」マーティン・パー（Martin Parr）

最も感銘を受けた環境保全老菩薩

◎文＆撮影・黄筱哲／訳・明彤

シャッターを切るのは簡単である。とりわけ、デジタルカメラが普及している昨今は、カシャッカシャッと押すだけで、あっという間に目の前の全ての風景を小さなメモリーカードに納めてしまう。しかし、撮影が仕事となると、昔のフィルムカメラの技術的問題はさておいて、現在では、限られたシャッターチャンスをどのように活用して、深い意味が映し出された写真を撮れるかが大事だ。その上、その限られた写真をもとに、内容を説明する必要がある。記事の内容と補完し合って効果を上げることもあれば、写真だけが一人歩きしてしまうこともあるため、簡単なことではない。

「慈済月刊」が創刊されて半世紀が経った。文字だけの報道に始まって、その後、取材と共に現場で撮影するようになり、今では取材にプロのカメラマンが同行するのが一般的になった。写真と文字が互いに補完し合うことで、読者に強い印象を与え、想像もしたことのなかった世界へと導いてくれる。

五十周年に当たって、三人のカメラマンに過去を回想してもらうことにした。それは、「慈済月刊」の取材で現場へ行く機会があったからである。三人は、選び出された五十枚の写真について、それぞれのスタイルで語ってくれた。

十数年前、私は、啓蒙の師である阮義忠先生の指導を頂いたのをきっかけに、撮影を人生の志業とすることを決意した。以来、この世の真善美を写真として記録して、社会の温かさを伝えることを主な目標とし、撮影の仕事に携わってきた。

慈済では、年輩のリサイクルボランティアのことを敬意をこめて「環境保全老菩薩」と呼んでいる。私は長年慈済の雑誌「慈済月刊」の「大地保母」というコラムで彼らの物語を書いてきた。「慈済月刊」が発刊五十周年を迎えた今年、歴年の号を展示する特別展示会が行われ、私は特別に十六枚の年輩リサイクルボランティアの写真を選び出した。

六十歳から九十歳までの貧しかった時代に、生まれた彼らの大半は文盲だが、純朴で運命に逆らわず、忍耐強い。若い頃に力仕事に就いて家計を担って来たからだ。年老いた今、今度はその両手でリサイクル活動に参加し、行脚僧の精神で以て、大通りから路地裏まで歩き回って資源を回収している。彼らはくず拾いではない。ただ資源が捨てられて環境の負担になるのを見かね、母親のような心で大地を慈しみ、子孫のために清らかな土地を守っているのだった。

記録することを通して、私は彼らの人生のストーリーを知った。息子や配偶者を失った心の痛みを経験した人や、体が不自由だったり病気の有る人、目の見えない人もいる。それぞれの境遇や信仰する宗教は違っても、皆、證厳法師の精神に感化されてここに来たのだ。リサイクルに参加することで、疲れ果てた人生を転換し、奉仕することで、生命の価値を見つけたのだった。傍目から見れば、風前の灯のような晩年に映るのだろうが、私が見た先輩リサイクルボランティア達は、老いてはいても、廃人などではない。彼らは蝋燭の光のように、わずかであっても確かにこの世を照らしており、人の模範となることを信じて生きている。

紙上写真展

郭黄招

一台南市東区・二〇一四年

戸の外側に目を向けると、道の向かい側に市場が見える。そのにぎやかな様子は、七転び八起きを見せる人生劇場のようだ。そのうち、首をのばし、耳をすまして、家族が帰ってくる足音がしてこないかと、つい期待してしまう。

郭黄招さんは八十七歳で、嘉義県六脚郷で農業を営んでいる。誠実な田舎の人の例にもれず、郭さんも純朴な人である。

證厳法師が、地球を救い、人をも救う理念で環境保全活動を呼びかけているのを知り、積極的に環境保全活動に尽くしている。自宅が市場から道を隔てた目の前にあるので、郭さんは毎日朝昼晩三回、市場へ資源回収に行く。リサイクルができる物は一つたりとも見落とさず、夜の回収が終わって家に帰り着くのは深夜十一時過ぎになる。堅い信念のもとで集めた毎回の回収物は相当な量で、資源回収車に週三回来てもらわないと運びきれない。

郭さんの夫は数年前に亡くなった。その翌年に次男も亡くなり、今は郭さん一人だけになって、急に頼りになる人がいなくなった。そんな郭さんは、時々悲しみに涙を流すことがあるが、環境保全活動からは退かない。

◎文&撮影・黄筱哲／訳・陳秀蓮

紙上写真展

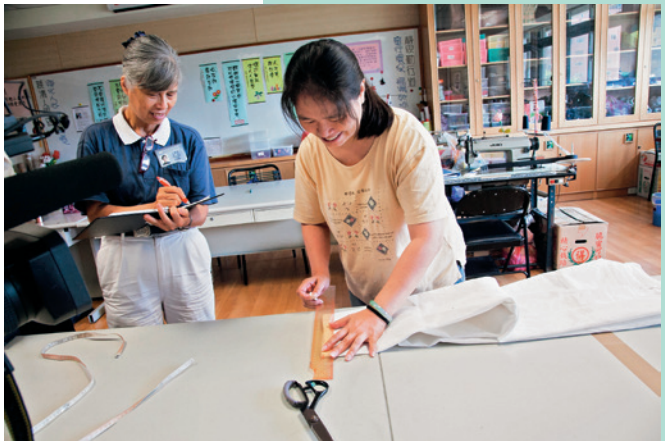
盧李綢

―台南市東区・二〇一四年

回収した一揃いの古着を着て、古い麦わら帽子を被り、腰が九十度近く曲がったお婆さんがこちらの方に歩いて来た。お婆さんが座るまで、お婆さんの顔はほとんど見えない。座ると、つば広の帽子の下から素朴な優しい笑顔がようやく見えた。今年八十四歳のお婆さんは、老菩薩と呼ぶにふさわしい人である。数年前に思いがけず事故に遭って脊髄を損傷た後、次第に腰が曲がってゆき、体の調子も昔に比べると大分衰えている。本来なら、休息して病を癒さなければならないが、お婆さんの意志は堅く、体の不自由を克服し、二輪の手押し車を利用して、体を支えながら一歩一歩歩いている。ただ一つの願いは、もっと多く環境保全に力を尽くしたい、ということだ。

◎文&撮影・黄筱哲／訳・本錦

真善美筆耕
ボランティアへの敬慕



文章の中から見つけた幸せ

文章を書いているお陰で私の平凡な人生に生き甲斐のある道が開けました

◎文・王鳳娥　撮影・張清文　訳・葉美娥

この一生の中で一番の幸せと生き甲斐は何か、と聞かれたら、「慈済人文真善美（筆耕）のボランティアに参加したことですよ」と、私は必ずそう答えます。

この二十数年をひも解いてみると、慈済の筆耕ボランティアとして多くのことを学びました。慈済のあらゆる活動、個々の慈済ボランティアの話、災害救援、冬季配付、文化交流、献体してくださった方々、訪問ケア、刑務所訪問などを記録した文章には、自分の歩んだ足跡と感動までもが書かれていました。また、訪問をする中で違う人生の物語にも出会うことができました。

それらの記事は私が慈済で得た「人生の大蔵経」とも言えます。それはたくさんの慈済の書籍や「慈済月刊」、ホームページ、または過去の「慈済道侶」にも載せられている話であり、私の人生の中で最大の財産なのです。

書くことは勉強のパートナー

一九九一年、四十歳を過ぎた私は花蓮慈済病院でボランティアをしており、毎日病室で病の苦しみを見ていました。喜びと悲しみ、出会いと別れの物語が常に演じられていました。私は、私の心に沁み込んだそれらの物語を、文章として筆記し、「慈済道侶」に投稿するようになりました。その後、「子供学習教室」で担任をしていたので、活動報告を書くようになりました。

文章を書き始めた頃は要領が分からず、いつも長たらしく、読みにくい文章ばかりで、よく編集者にカットされました。二百～三百字しか残されず、記事というよりは「コラム」になってしまったことも多々ありました。時には適切な形

容詞やタイトルなど、たった一つの言葉のために、智慧を絞って考えることも多く、そんな時はたいてい夜中寝ている時に突然良い言葉が浮かんでくるのです。すぐベッドから飛び起きて書きとめて、やっと安心して寝られます。いいタイトルが浮かばず、食事している時や歩いている時、仕事をしている時、また寝ている時もずっと考え込んでしまいます。

文章を書くことが疲れる時もありますが、とても楽しく、夢中になります。若い頃にもっと勉強しておけばよかったとため息をついたり、知識が足りないと思っている時には、「慈済月刊」の良い文章が、私の一番のパートナーです。證厳法師の知恵あるお言葉から教えを受け、慈済の新しい情報を得、文章を勉強することができました。家の本棚には、一九九一年発行の二九一号からずっと「慈済月刊」を並べてあります。近頃は電子版が出たので、印刷冊数が少なくなったので、手に入った時には宝物を見つけたように、早速読みます。

慈済に入った時、慈済筆耕チームのリーダーの陳美羿さんと知り合い、彼女の勧めで慈済の大型ボランティア活動を記録することになりました。当時書いた文章は硬い上に、パソコンのキーボードの勉強も始めたばかりで、なかなか頭と手を同時に働かせず、速報の「慈済快報」に間に合わないこともよくありました。

「普段から多めに書いておけば、そのうちに本を出せますよ」といつも陳美羿さんに励まされましたが、作家になるなんて、私にとって贅沢な夢だと思っていました。ただ陳美羿さんのおかげで頑張ることができたので、慈済の刊行物にも幾度か載せていただきました。私はそれを宝物のように大事にとっておきました。まだ「慈済月刊」の記事執筆など考えられなかった頃のことです。

二〇一三年のある日、「慈済月刊」の編集者が、「鳳娥さん、あなたが慈済小学校の玫瑜さんについて書いた『幸せいっぱいの家』が『晶瑩童心』のコーナーに載りますよ」と電話で知らせてくれました。まるで宝くじが当たったような気分になり、こんな嬉しいことはありませんでした。私の文章が初めて「慈済月刊」に記事として掲載されるのです。

私の小さい頃は、家に余裕がなかったので、高校に進学せずに中学校を卒業後すぐ台湾西部の工場に就職しました。家の手伝いと仕事をしながら、職業学校の夜間部に通っていました。母はいつも私を高校へ行かせなかったことを気にして

いましたが、私は慈済の地域大学で勉強し、成長していけるので感謝しています。

人文真善美（筆耕）のボランティアになったことで、私のような者でも人の役に立てることが分かりました。慈済のために歴史を書き、慈済人の美と善の菩薩の姿を残す役目です。また、自分自身にとっても、平凡だった人生が素晴らしく生きがいのある道になり、これからもずっと歩いて行けそうな気がしています。

真善美筆耕
ボランティアへの敬慕

尖った筆をしまい、月夜のように澄んだ心で綴る

美しい善い話を書き慣れた私に疑問が浮かんだ
色彩のない文章は読者に受け入れられるだろうか
津波が襲ったスリランカを訪れた年のことだった

◎文・陳金香（マレーシア）　撮影・蔡永瑩　訳・高雪白

小さい頃、親の寝床に潜りこんで、自分が全世界を駆け回って旅している姿を想像するのが好きでした。少年になってからは、ベッドの上に横たわり、よく本を読みました。とくに『西遊記』がお気に入りで、孫悟空が天宮で大暴れしたり、化け物を退治して悪魔を追い出したりする場面をワクワクしながら読み、疲れたら眠ってしまいました。夢の中で自分が孫悟空となり、宙返りして遠くの雲へ飛び上がるのは、何より楽しいことでした。

結婚後、マレーシアのクアラルンプールへ行って事業を始め、そこで定住しました。あらゆる夢は現実の生活に直面して、崩れ去ってしまいました。創業の頃は借金の返済に追われる毎日でした。異郷での苦しい暮らしは涙なくして過ごせません。毎日の仕事と返済の不安とストレスで、精神的に参り、いっそ窓から飛び降りて一生を終えようと

思った時もありました。

悲しみに苛まれ、話し相手のいない私は、筆を取って小説を書き始めました。あらゆる愛、恨、情、仇を登場人物を通して表し、現実の社会へのささやかな抗議に代え、ストレスを発散していました。楽しみなどありません。幸せなど私にとっては夢物語であり、手が届かないものだと思っていました。

ある日、中華大会堂という華僑の施設で、有名な台湾人作家の高信疆さんの講演会に参加した時、證厳法師のことを聞きました。その夜、私は涙を流しながら思いました。一人の出家僧がどれほど苦労をして病院を建てたのだろうと。證厳法師の苦労は、私がしている苦労の千倍にも上るに違いありません。この時から證厳法師と慈済という仏教団体のことが、私の心に深く刻み込まれました。私が長年迷い探してきた物を、やっと見つけたような気がしました。

考え方が変わると空まで違って見える

その後、慈済を探し当てるのに七年間もかかりました。ある日、見知らぬ一人の女性が私に近寄ってきて募金を呼びかけ、会員になりませんかと誘ってくれたのです。入会申込書に記入している時、私は手が震えていました。心の中で「見つかった！　やっと見つかった！」と叫んでいました。

険しい人生行路の果てに、やっと帰依するものが見つかりました。これからは混沌とした浮世の中で、迷わずに済むのだと思いました。曇っている心がすっかりと晴れました。手に持っている筆は、もう恨みを発散させるための道具ではなくなりました。ここで出会う人々の人生には、単なる苦しみだけでなく、病を患う痛みがあり、血の滲むような悲しい社会の真実が見えます。私は慈済のボランティア記者として、それらを一篇一篇の文章に書き綴ることになったのでした。

この世はなぜこんなに苦しいことが多いのでしょうか。私は取材と執筆の仕事を通して、人々の人生について聴いて、書いて、苦しみを分かち合っています。インタビューの時はいつも涙が溢れてきて、心が痛むのです。

一年、また一年と月日は流れ、苦難の人々の物語を綴っているうちに、自分の境遇も忘れてしまいました。以前の苦しみは何でもなくなり、空を仰ぐと幸福は頭の上に、すぐそばに、心の中に、一念

の中にもあると感じるようになりました。

しばらく愛と善行の話ばかり書くうちに、自分の文章が色褪せてきたように感じ始めました。文才もない私のような者が、「愛」と「善」を綴っているだけの平凡な文章で、誰かを感動させることができるのだろうか、とジレンマを感じるようになりました。ちょうどこの時、スマトラ沖地震が発生したのです。被災地の取材を通して、私はもう一度、文章について考え直すことができました。

私はボランティアと一緒に被災地を訪れ、泥と瓦礫の積もるスリランカのベントータ海岸へ行きました。泥沼と瓦礫の上を歩いていると、死体の臭いが漂ってきました。災害から何日も過ぎて、悲惨な情景が目の前から消えても、被災者の心に癒えない傷口となって強く残ることでしょう。

毎日被災者の口から聞く話は、亡くなった人や倒壊した家のこと、幸いに生き残ったけれど何一つ残っていないということばかりでした。話を聞いているうちに、私の中に、「この人たちの明日はどうなるのだろう。明日は笑えるのだろうか」という疑問が起こりました。私にはその答えは分かりませんでした。ただその場で、彼らの悲しみに苛まれる顔を見ていたくありませんでした。かといって、ただ同情していても仕方ないのです。その時、慈済の配付した物資とボランティアの抱擁が、本当に被災者に伝わったのかという疑問が生まれました。

お金で買えない筆を持って

テントの側にある空地で物資を配付している時、ふと顔を上げると、空に月がくっきりと見え、優しく大地を照らしていました。月はまるで母親のように優しく被災した子供たちを抱き込んでいるようでした。

その時、一人のおじいさんが近寄ってきて私の袖を引くと、テントを指差したのです。見ると、机の上にあるのは證厳法師のお写真と配付物資の米袋から切り取った慈済のマークでした。私は自然に跪いて礼をしました。起き上がった時、おじいさんも私のまねをして、感謝のお礼をしていました。

おじいさんは立ち上がると、私に向かってにこやかな笑顔で手を合わせました。私は、心の中から来てよかったと思い、心が安らかになりました。

おじいさんも苦しい時に愛を受けたこ

とで、未来に立ち向かう勇気が出て、心から笑えるようになったのでしょう。そして心の中が温かくなり、苦痛も絶望も薄れたことでしょう。

このような美しい話を書かずにいてよいのでしょうか。この愛を私の筆で広く伝えずともよりのでしょうか。慈済の行く世界には美しい善い話があり、そのすべてが「大蔵経」の一部のようです。私はこの中の一人になれてとても幸せです。これほど多くの人の人生を見ながら、悲しみと喜びを分かち合えることを心からありがたく思いました。

言葉を飾ることはできませんが、ただ簡単な言葉で真実に忠実に書くことを学びました。あの時、筆を放さないでよかったと思っています。二十年間、真善美の記録ボランティアをしてきた中で、幸福を探し出しました。人々の物語を書くことで自分自身が豊かになりました。

あの時の明るい月と一本の筆が、私の心の糧です。お金で買えない宝物なのです。

真善美筆耕
ボランティアへの敬慕

◎文・翁詩盈（マレーシア）　撮影・顔文煌　訳・慮擷

堅い決意は無限の力

人の人生すべてが一篇の経典を成しています
私はその奥深くにある宝を探しているのです

ネパール震災の取材中、慈済人医会（慈済の医療ボランティアチーム）の李暁卿医師にインタビューできたことは、私にとって得難い巡り合わせでした。彼女は若い頃から医者になるという志を立てていたのですが、実際に医学を勉強し始めたのは三十歳の頃で、同級生より十歳も年上でした。彼女の同級生はすでに社会で成功していましたが、彼女は幼い子供同然でした。それでも艱難を恐れずに真面目に学び続けたのです。李暁卿医師の人生に対する堅い決意

は、私を奮い立たせ、記者になるよう励ましてくれました。

運命のマスコミの道へ

十五年前、高校を卒業したばかりの私は、将来どうしようかと迷っていましたが、いつしか心の底からマスコミの世界に進みたいという声が涌き上がってきました。

四年間の大学生活では、後悔しないようにいろいろな学習を通して自分の視野を広めました。そして自分のためだけに人生を生きるのではなく、社会に奉仕すべきだということを学んだのです。そうは言っても、どんな役割を果すのか、何を考えたらよいのか、まだよくわかりませんでした。

私は学校の雑誌の編集をしたことがきっかけで、マスコミに趣味を持つようになり、人と人とを近づけるこの仕事に進もうと決めました。

仕事をする中で、人々の暮らしに溶け込むことは、自分の人格を養う上でも大きな意味がある、と信じています。社会に入ったばかりの新人の私にとっては、職場の環境や文化に溶け込むことが一番大切なことでした。

慈済との関わりは、二〇〇〇年の大学の長期休暇の時でした。私は友達に誘われて、慈済専門学校青年キャンプに参加して慈青（慈済の学生ボランティアチーム）の一員になりました。初めてこの団体に触れ、文化的で、大愛と感謝の心を重んずる特色が、心に深く刻まれました。その後、慈青のことをもっと知りたかったのですが、サークル活動に時間を注いでいたため、行動に移せませんでした。

卒業後、新聞を見て慈済文化出版センターが記者を募集していることを知りました。私は応募に必要な自伝を書いて申し込みました。幸いにも慈済との縁が再び繋がり、記者と編集者になるという夢が叶いました。

ある日オフィスで映像の編集をしていた時、若くして骨癌を患った俊勛さんがボランティアに寄り添われた姿が目に飛び込んできました。それは俊勛さんの生前最後の映像でした。その時、「生命は呼吸の間に宿る」という感慨が湧いてきました。二十年の人生で初めて「生と死」を身近に感じました。

その後、私はマレーシアで「慈済月刊」の記者と編集者を担当し、大愛テレビに転勤してからの十四年間は、インタビュ

ーと番組の制作、つまり平面から立体のメディアへと移り、音声と画像の仕事に携わってきました。どんな人物やテーマに巡りあっても、どんな困難に陥っても、仕事は懸命にやり遂げるべきだと思っています。毎回のインタビューと、それを書き起こすという仕事は、神様からもらった貴重な贈り物だと信じています。

メディアの清流を目指す

二〇一五年、クランタン州でマレー系住民のアトラをインタビューしたことは、私にとって新しい体験となりました。五人家族の彼の家は水害で流されてしまい、四カ月間という長い間テントで暮らしたそうです。慈済が災害支援に駆けつけると、彼は慈済の被災者雇用制度に参加して、仮設住宅の組み立て作業に従事しました。彼は村の年寄りや片親の家庭を優先的に入居対象に選んで、自分の家は後回しにしていたのです。私は感激しました。

インタビューの時、アトラは「苦難の人を見るに忍びないのです。例えば、年老いたお婆さんや母子家庭の苦労を目にすると、私までもらい泣きしてしまいます」と言いました。敬虔なイスラム教徒のアトラは、愛に満ちた心で一心に仮設住宅を組み立てていました。

「この世のあらゆるものは、人間の所有物ではありません、あっという間に神様に召されてなくなります」とアトラは言いました。この言葉は、私が災難に対して持っていた考えを変えました。

インタビューに応じてくださった方々は皆私の人生の先輩です。李暁卿医師は驚くべき意志力をもって、挫折や困難に遭っても、堅い決意を持って乗り切れることを教えてくれました。それに年齢は決して夢を阻む足かせではありません。いくつになってもゼロから立ち直せるのです。

アトラの例から楽観的な人生観と、他人を利するという考え方を学びました。逆境に直面して平常心でいられるかどうか、これは人生の重大な課題の一つです。

私はインタビューで出会った人を大切にしています。上人の言葉にもありますが、人はその人生すべてが一編の経典であり、私はその奥深くに眠る宝を探しているのです。慈済のメディアの職員と慈済委員（慈済の幹部ボランティア）という二つの任務を担う私は、この仕事を通して慈済の歴史を残し、人類の美しい模範となるよう努め、人心を浄化するメディアの中の清流でありたいと思っています。私にもできるはずなのですから！

真善美筆耕
ボランティアへの敬慕

悔いのない人生を筆で歩む

◎文・林翠蓮（シンガポール）撮影・黄銘村　訳・慈昶

善行を広め、悪行を隠し
さらに大勢の人を導いて善事を行う
「善」と「悪」の綱引きは、人が多くいる方が勝つ

私は中学を卒業するまで中国語の教育を受けましたが、中国語で長い文章を書いたことはありませんでした。それが慈済に入ってから、思いがけず中国語で文章を書く人生が始まりました。

読解を通し
文字の深い意味を味わう

一九九六年に「アジア週刊」という雑誌で證嚴法師についての報道を読み、慈済が台湾や世界各地でたくさんの善事を行っていることを知りました。そして、もしシンガポールに慈済があれば素晴らしいなあ、と思っていました。

二年後のある日、姑を病院に送る途中、「慈済文化センター」の看板を見つけました。「まあ、シンガポールにも慈済があるの！」と、私は嬉しくなって早速尋ねて中に入り、『静思語』を購入したのです。読んでみると、分かりやすい言葉だけれどその意味はとても深いものでした。證嚴法師は大変智慧のある方だと思いました。

しかし、その後まもなく看板がなくなりました。私は「慈済文化センターはどこに移動したのだろう？」と疑問に思っていました。それから一年後にチャイナタウンを通った時、偶然に慈済の看板に出会いました。「ここに移っていたのね」と思い、早速中に入ると、林淑婷師姐（スージェ）（師姐は女性ボランティアの呼称）が慈済の設立の歴史とさまざまな活動について説明してくれました。私はとても感動し、

その日、会員になりました。

ある日、慈済連絡拠点の秘書をしている郭友義さんから電話がかかってきて、「原稿のタイプを手伝っていただけませんか？」と聞かれました。私が会員資料に中国語のタイプができると書いていたからです。私は喜んで承諾しました。それから郭師兄（師兄は男性ボランティアの呼称）から不定期に手書きの原稿が届くようになりました。原稿をタイプしているうちに、時々文章が分かりにくいことが気になったので、「文章を直してもよろしいですか」と伺ってみたのです。こうして私は、原稿タイプから慈済人文真善美の筆耕ボランティア（メディアボランティア）の一員となりました。本当に思ってもいなかったことでした。

中学時代には台湾の作家の本をよく読みました。香港の金庸さんと梁羽生さんの武芸小説も、夜更かしをして夢中で読みました。それから中国の作家の余秋雨さんの作品も好きで、『文化苦旅』『山居筆記』など、とくに『文化苦旅』は何回も読みました。文化に造詣が深く、言葉巧みに描かれた場面は生き生きしていて、まるで目の前にスクリーンが現れたようでした。私は中国語の書物からとても影響を受け、中国文化の奥深さを感じました。とても真似のできるものではありませんでした。

真心込めた報道を

シンガポール支部が設立した当初は、筆耕ボランティアがとても少なかったのです。二〇〇四年に姑が亡くなった後、時間にも余裕ができたので、さらに多くの慈済の志業に参加しました。その時、シンガポール支部の活動が急速に発展し、いくつかニュースで取り上げられた医療支援ケースがありました。例えば歯に巨大な腫瘍を抱えたインドネシアのパタン島の男の子や、先天性筋ジストロフィーを患うシンガポールの潘兄妹が、台湾の慈済病院で治療を受けることになり、私は彼らにずっと寄り添い、ケアをしながら報道しました。

その頃、シンガポール人医会もよく海を越え、インドネシアのパタン島に施療に行っていました。私も同行し、その様子を執筆しました。その記録はシンガポール支部が発行する「慈済世界」に載せていただき、だんだんと書く自信がついてきたのです。

はじめは慈済特有の用語が分からなかったので、いつも質問していました。「ど

うして花蓮静思精舎を訪ねることを『行く』ではなく『帰る』と言うのですか？」などと質問したものです。花蓮は慈済人みんなの「心の故郷」なので、「帰る」と言うのが当たり前だということが、やっと分かるようになりました。またある日、「膚慰」という聞きなれない単語に出くわし、「撫慰」とはどう違うのかと疑問に思いました。證厳法師の開示によると、「傷ついた人に寄り添って慰めてあげましょう」とありました。手で触れると、相手は落ち着きを取り戻せるからです。それほど心を込めてケアをするということです。慈済で使われる言葉の意味を、深く読み取りたいと思いました。

また、テレビなど一般のマスコミ報道は、ともすれば三面記事に偏りがちですが、大愛テレビには慈済ボランティアの善行の報道が溢れています。「慈済の慈善活動を社会に知らせたい気持ちがあるからだろうか」と最初は思いましたが、原稿を書き続けるうちに、悪いことを知らせることより、人々を善行に導くことの方が大切なのだと思うようになりました。これはまるで善と悪の綱引きのようです。

よい文章を書くために、私はよく台湾の「慈済月刊」を参考にします。シンガポールに送られてくる冊数には限りがあるので、見かけると、古いものでも手に取ります。私の手本です。皆さんがどんな見方をしているのかがよく分かり、とても勉強になります。

最近、スリランカに関する報道を多く書きました。二〇〇四年にスマトラ島沖地震が発生してから、シンガポール支部はスリランカを援助し続けてきました。私も四十回以上往復し、急難救助の様子や大愛村と学校建設の中長期計画、そして施療活動などに携わりました。

二〇一三年から私はスリランカ支部の総務にも携わることになり、執筆と平行して行っています。昨年と今年の六月、ハンバントータで土石崩れが起きたので、実地調査と震災援助の記録だけでなく、撮影と報告用の資料作成を担当しました。

撮影を担当したことで新しい見方を学び、執筆と両方の技術が進歩したような気がします。これから仏教の教えを日常生活に取り入れた慈済の活動をさらに深く報道し、誰でも菩薩になれるという真理を伝えていきたいと思っています。それはまた、私にとって大切な学びの機会であり、私の人生を豊かにしてくれています。おかげさまで今生に悔いはありません！

一日の計

◎文・釋徳仴／訳・山田智美

❑静思語
時を惜しんで行動し、実のある人生を歩む

一分一秒たりとも無駄にしない

「一日の時間には限りがあります。ただ睡眠を貪っていては時間はどんどん過ぎてしまいます。時を惜しみ、命を惜しみ、衆生の役に立てるよう自分の命を活用しましょう。人を利し、己も利するのです」

朝会で、上人は、皆に早起きをして精進する時間を持つようにと励まされました。「朝の三時から今この時までに、精舎ではもうすでにたくさんのことをやり終えました。すべては時間の積み重ねです。一秒たりとも無駄にせず、日々時を惜しんで物事を行い、実のある人生を歩みましょう。自分の命を世の中のために役立たせることは価値ある人生です」とおっしゃいました。

台湾内外の慈済人から、各地で行われた浴仏式の映像が続々と届きました。そのうちのフィリピン・マリキナ市での浴仏式では、夜、蝋燭を手にした一万人以上もの人が人文字を作りました。上空から撮影したその荘厳な光景をご覧になった上人は、感嘆の声を漏らしました。「仏の周りを回る時、どの列も整然としていました。皆が心を一つにしているこの様は、本当に感動的です」と讃嘆されました。

上人は、慈済人が身をもって世界各地で人々を感化していること、実際の行動で人々に感動を与え、啓蒙していることに感謝されました。この世のすべての人の心が清く美しくあるよう、善の種がさらに増え続けるよう願われました。

美しい善の物語を伝える人文志業

「人文志業が手がけている四大志業の精髄とは、『人文の中の人文』です。四つすべての志業が互いに緊密に繋がり合い一体となることを私は一番期待しています」と上人はおっしゃいます。人文志業会議の際、上人は、志業ごとに異なる役割や理念、それぞれの特色によって、四大志業の「真実の法」を体現するようにとおっしゃいました。そうするにはどうすればよいか、人文志業に携わる人々がよく考えなければなりません。皆が心を込めて力を尽くせば、四大志業と共に自分たちの慧命を成長させることができると励まされました。

釈迦生誕日、母の日、世界慈済の日の三つの慶事を同時に祝う慈済の浴仏式には、異なる宗教の宗教者や信徒も大勢参加し、親睦を深めました。上人は、正しいことを深く信じ、互いに胸襟を開いて話し合うならば、信仰の違いによる隔たりはないのですとおっしゃいました。

ただ心で望んでいるだけでは人から尊敬されません。慈済は何も求めずに、苦しんでいる人がいたら、その人との縁を大切にして、真心込めて尽くします。慈済人は水害に遭ったエクアドルの人々を全身全霊で支援しました。この人たちは慈済の真心を感じ取って、慈済人に優しく接し、仏教徒ではないけれども、この度慈済が行った浴仏式に参加してくれました。

慈済の国際災害支援の場では、数々の感動的な物語が誕生しています。これらの出来事を伝えるのが人文志業に携わる者の役目です。そのほか、災害時以外での普段の暮らしの中でも、さまざまな慈善活動が行われており、これらを写真や映像、文章として記録に残す必要があります。人文志業のそれぞれの志業が報道の質をさらに高め、志業に関わる職員同志の一人一人が使命を担い、命の良能を発揮して共に成長してゆくことを、上人は期待されています。

（慈済月刊六〇七期より）

慈済大事記八月

訳・済運

０８・０１	◎台風９号と１０号が台湾南部に大きな被害をもたらし、屏東県林辺郷など沿岸地帯が最もひどく被災した。この日、慈済病院の合心防災調整センターが林辺郷で安心家庭訪問活動を展開し、ボランティアが被災した６村の１３８３世帯を訪れて必要なサポートについて聞くほか、１０８６世帯分の見舞い品を届けた。
０８・０２	◎慈済基金会は新北市中和区景安里事務所と共同で地域ケア拠点を設置して、３２人のお年寄りの健康を促進するため、課外活動や食事を提供している。秀明里と秀仁里の３０人の慈済ボランティアが視察した。
０８・０３	基隆の慈済ボランティアは要請を受けて、法務省矯正署基隆刑務所で「父の日・親子キャンプ」活動を催し、受刑者と家族の架け橋となって互いの交流を促進させた。 ◎慈済フィリピン支部はフィリピン副大統領室の要請を受けて、南部のマラウィ市で避難生活を送る難民に対し、マラウィロータリークラブを通じて４９８００枚の衣類を配付した。 ◎台風９号と１０号で被災した東港鎮興東里、枋寮郷新龍村及び太源村で、慈済屏東支部は４４人のボランティアを動員して安心家庭訪問

08・03	活動を実施した。164世帯を訪れて158人分の日用品パックを配付した。 ◎21人の彰化慈済ボランティアは法務省矯正署彰化刑務所で定期訪問を行った。ボランティアの薛當景と母親の洪芒以は、問答方式を使って、40人の受刑者に母親と描いた絵に関する心境を語ってもらい、これをきっかけに親への愛情を取り戻すことを期待した。
08・04	慈済基金会宜蘭県頭城鎮港口里地域ケア事務所がこの日、港口里里民センターで開設した。慈済の宜蘭における初めてのケア拠点となる。慈済と港口里地域発展協会によって開設され、6月2日、試験的に毎週金曜日の年輩者クラスと健康促進の奉仕が行われ、地域の年輩者の心身の健康に対するケアを行った。
	慈済屏東支部は3人の社会福祉人員と41人のボランティアを動員し

08・05	て、台風9号と10号で浸水被害が大きかった林辺郷で2度目の安心家庭訪問ケアを行った。612世帯に415人分の日用品パックを配付した。また、家屋の損傷が激しい世帯と貧困世帯の37世帯が、慈済の長期支援対象リストに登録された。
08・07	香山付近の国道3号線下り車線で、トレーラーがパトカーとレッカー車に追突する大きな事故が起きた。5人が負傷して病院に運ばれ、警察官1人が死亡した。新竹慈済ボランティアは知らせを受け、直ちにケア活動を行った。連日、死亡した警察官の家族に付き添ったほか、負傷者を見舞った。19日までに延べ196人のボランティアが動員され、59食分の昼食と15食分の夕食を提供し、5つの家庭に5万5千元の緊急見舞金を配付したほか、募金を募って外科用車椅子を購入し、負傷者に贈呈した。

08・08	嘉義大林慈済病院は嘉義県認知症共同介護センターの業務を引き受け、認知症が疑われる患者を病院に引率し診断させたり、サポートケースの資料管理を支援する。要介護者の病状に応じ、介護者に対して介護関係の情報やサポートの提供のほか、調整や転院の手続きのサポートなどを行う。この日、張花冠・嘉義県知事と陳金城・大林慈済病院副院長が出席して除幕式が行われた。
08・09	◎澎湖地区外国籍船員休日活動センターがオープンし、澎湖の慈済ボランティアは外国籍船員に施療と無料散髪を提供したほか、古着を配付した。 ◎慈済慈善志業基金会は、トルコのナリンアイサ社からビルを借り受け、マンナハイ学校の校舎として使うことになった。これまでトルコの学校の一角を借りて勉強していたシリア難民の子供たちは、自分たちの学校で気兼ねなく安心して勉強することができる。この日、スー

	ダンガジ市のアリ・ウスラマン市長が見守る中、賃貸契約が交わされ、慈済慈善志業の劉效成副執行長とビルを所有するアイハンナリン社が契約書にサインした。
08・10	ミャンマーでH1N1型インフルエンザが流行し、ミャンマーの衛生部緊急医療署署長であるザウワイソエ教授は、書簡で防疫物資の支援を慈済に要請した。花蓮、大林、台中、台北の4つの慈済病院は3000錠以上の抗生物質や2000枚の隔離服、ウィルス検査薬、アルコール消毒スプレー、体温計など約760キロの物資を89ケースに詰め、本日3回に分けてミャンマーに空輸した。
08・14	慈済は2014年にボスニア・サマジ市が洪水被害を受けた際、同市を支援した経緯がある。今回、同市は予防措置として、救命ゴムボート2隻を購入することにしたが、資金不足のため、慈済に支援を要請

	した。この日、ドイツの慈済ボランティアが慈済基金会を代表して2隻のゴムボートをサマジ市に寄贈し、ボートは赤十字に引き渡された。
08・17	慈済基金会が災害を減らす希望工程の一環で、苗栗県で支援建設している公館中学校の起工式が行われた。慈済が支援して、学校があった元の場所に4階建ての校舎を建てる。工事期間中、10室の仮設教室を建設して使用する。8月21日に起用式を行う。
08・19	◎慈済基金会が支援建設した合流集落の恒久住宅の起用式典が本日行われ、林碧玉・慈済副総執行長と鄭文燦・桃園市長らが出席して祝賀会が開かれた。桃園市復興区合流集落は2015年に台風13号で被災し、土石流で村が消滅した。幸いにも死者はなかった。慈済と政府が協力して羅浮里に15棟の恒久住宅を建設し、14世帯が入居した。入居世帯は家族構成に従って配分され、家具や給湯器、食器類など

	12項目の生活必需品などの入居祝いが贈られた。また、集落に居住する先住民の信仰を尊重して、キリスト教の教会も建設された。
	◎西アフリカのシエラレオーネの首都フリータウンで14日、連日の豪雨により、水害と土砂災害が発生した。慈済基金会は台湾政府の対外支援米5トンを届け、19日からはフリータウン明愛会、ヒーリー財団、ランイ財団と合同で、被害が大きかったレジェンド地区などで炊き出しを行う。
08・23	台風13号が強風と豪雨を伴って香港を襲い、沙田城門河が増水し、橋の下で寝泊まりしていたホームレスの家財道具が流された。慈済ボランティアは支援の要請を受けて、直ちに被災したホームレスを見舞うと共に、慈済大園事務所に避難させ、食事のほか、衣類や日用品を提供した。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 ＃ 4002
0912-412-600 ＃ 4002
花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 台北県新店市建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中県潭子郷豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
FAX:886-4-36021123
慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301
FAX:886-3-8563604
台北支部
106 台北市忠孝東路三段 217 巷 7 弄 35 号
TEL:886-2-27760111
FAX:886-2-27761244
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ハワイ支部（Honolulu）
TEL:1-808-7378885

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス
TEL:44-20-88699864

フランス
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

２０１７年９月１９日発行・２４９号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・王麗雪
校　閲　山田智美
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただけますれば幸いに存じます。（日文組編集同人）

１９７０年の冬季配付活動の前日、遠隔地への訪問ケアに向かう途上で、バスが花蓮渓の川底の泥に乗り上げてしまった。女性ボランティアたちが裸足で力いっぱいバスを押しているこの写真は、初期の慈済を象徴する１枚といえる。このような画像と活字のおかげで慈済の歴史が忘れられずにすむ。半世紀にわたって時代を刻み続け、人の善行を書き記し伝えて来た月刊誌「慈済月刊」を、是非手に取ってみてほしい。

（図 / 慈済花蓮本会提供）